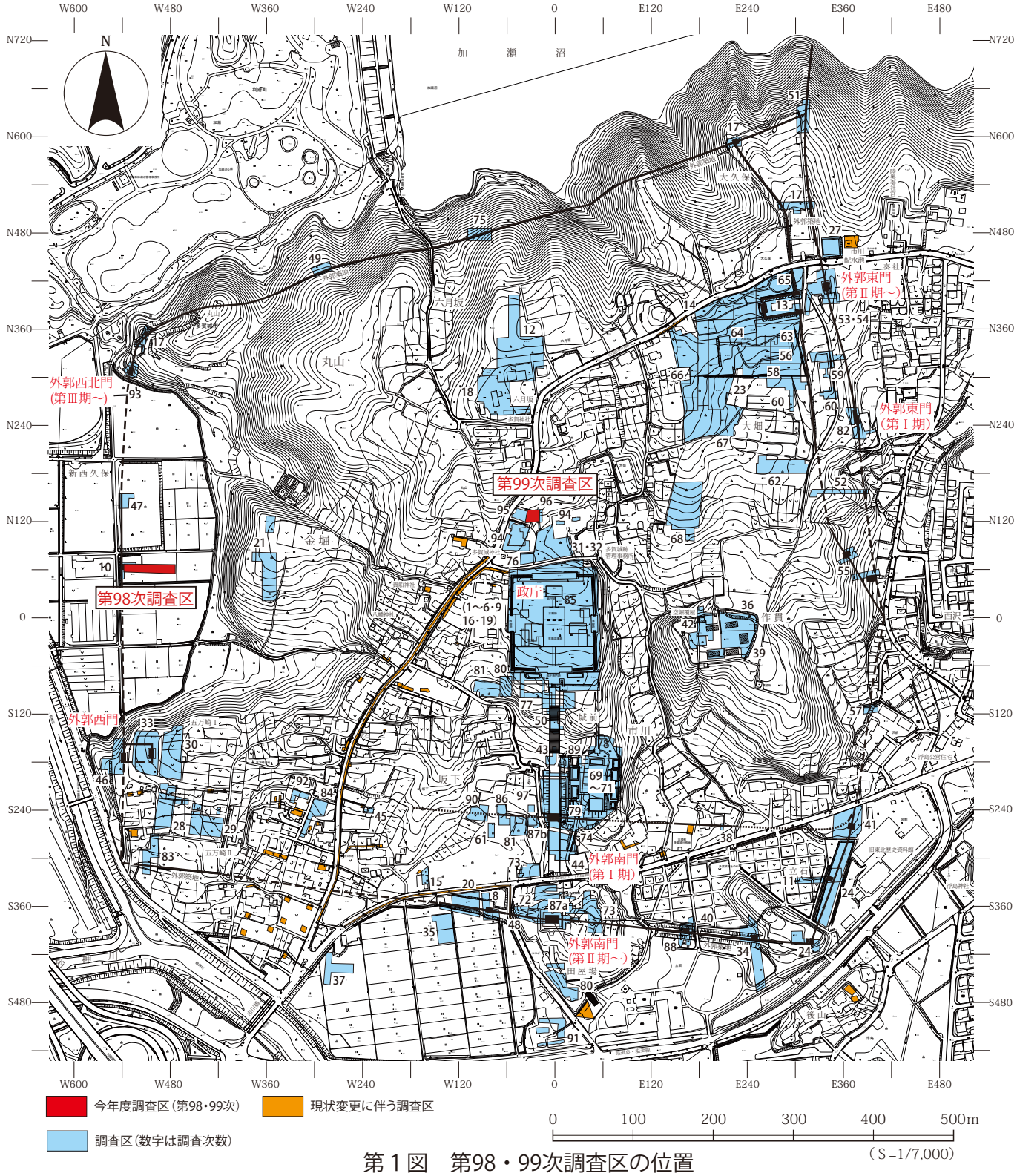
多賀城跡

令和５年10月14日（土）
午前10：30～ 12：00

第99次発掘調査現地説明会資料

宮城県多賀城跡調査研究所

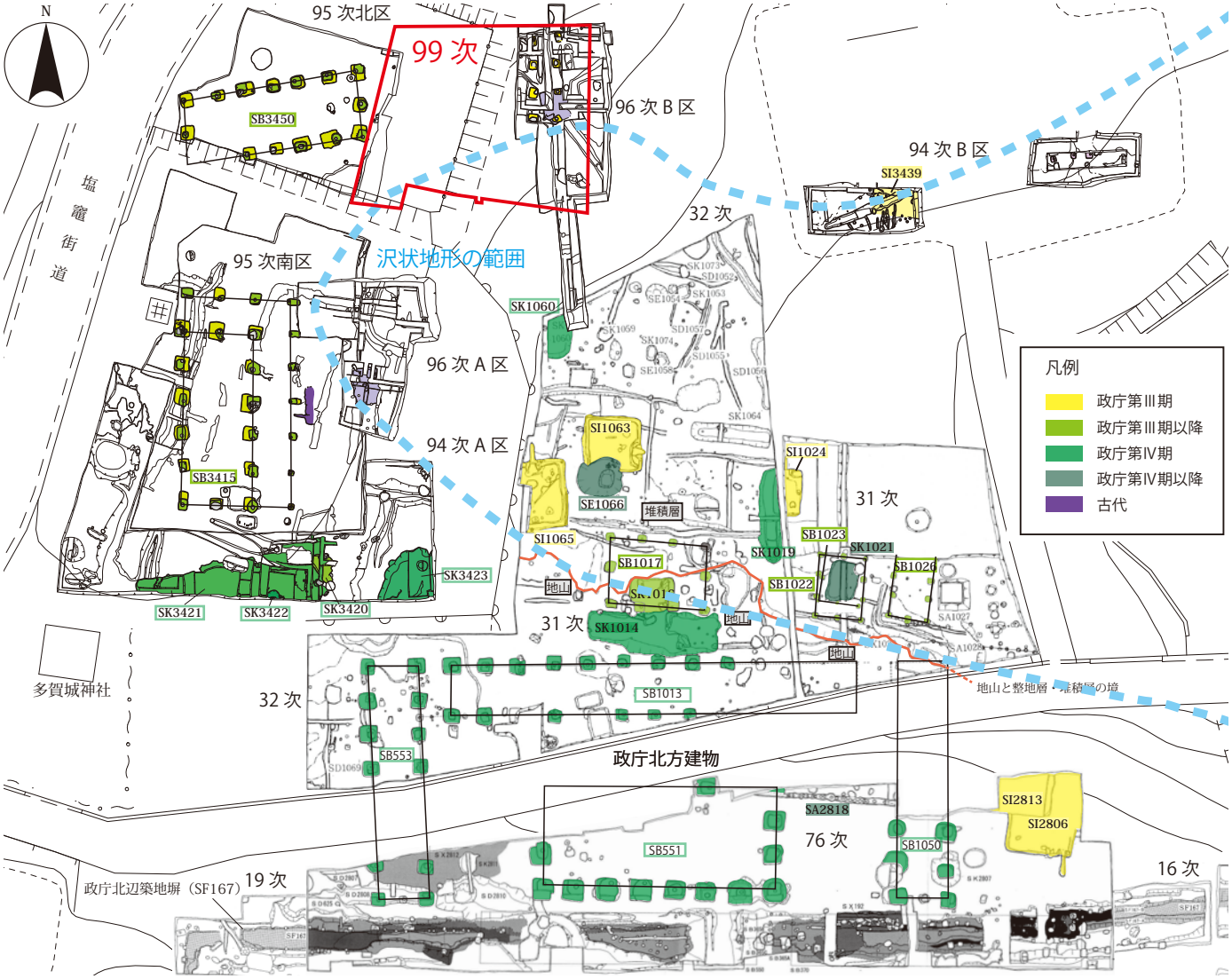
宮城県多賀城跡調査研究所では、昭和 44 年以来、特別史跡多賀城跡の発掘調査を計画的に実施し、遺跡の実態を解明する研究を進めています。今年度は、外郭西辺の新西久保地区を対象に第 98 次調査を、政庁地区北方を対象に第 99 次調査を実施しました。このうち、第 99 次調査の現地を公開し、成果を説明します。



第１図　第98・99次調査区の位置

周辺の調査と第99次調査の目的

政庁地区北方の調査はこれまで７次にわたって行っており、政庁第Ⅲ期（780 ～ 869 年）から掘立柱建物や竪穴建物などの遺構があること、第Ⅳ期（869 年～ 11 世紀前半）には政庁と一体的に機能した大型の掘立柱建物群「政庁北方建物」がみられることなど、政庁と密接に関係する地区であることが判明しています。昨年度の第 96 次調査では、第Ⅲ期とみられる掘立柱建物の一部を確認しました。今回は、その規模と構造を把握する調査をしました（第２図）。



第２図　第99次調査区周辺の調査の状況

第99次調査の成果

調査区は、政庁正殿から北におよそ 100 ～ 140mの位置にあります。政庁の北側に東から入り込む沢の沢頭付近にあたり、北東から南西へ緩やかに下る斜面になっていました。調査区は第 95・96 次調査区と一部が重なる形で設定し、古代の遺構として掘立柱建物・鍛冶炉・土坑を発見しました。遺物は、土器・瓦・鉄製品・鉄滓などが出土しています。ここでは代表的な遺構と遺物を紹介します。

写真１　第 99 次調査区遠景（南から）

第３図　第99次調査区 平面概略図

（1）掘立柱建物

東側に廂（ひさし）がつく南北６間（けん）、東西３間の南北棟です。斜面を東西約 10.5m、南北約 7.0mにわたって南側に削り出し、整地をして建てられています。柱はすべて抜き取られていますが、19 個確認した柱穴（はしらあな）から、規模は南北約 15.0m、東西約 7.5m とみられます。

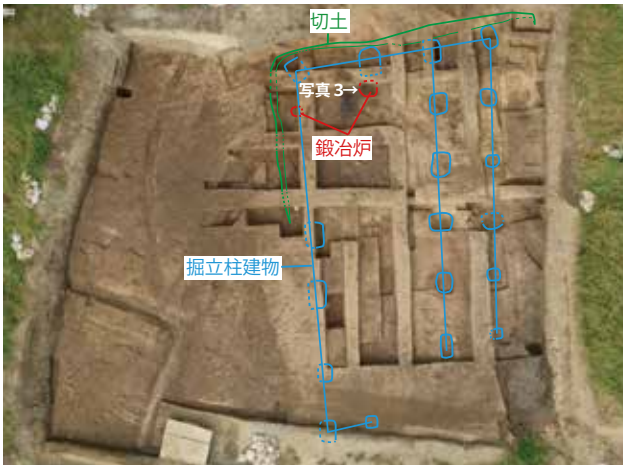


写真２　掘立柱建物（上が北）

（2）鍛冶炉と鍛冶関連遺物

鍛冶炉は掘立柱建物の北半部から、３基見つかりました。そのうち２基（写真３）は、同じ場所で作り直されています。長径 30 ～ 50cm 程の楕円形で、壁面が強く焼けており、椀形にくぼんだ底面には鉄滓（鉄以外の不純物の塊）が残っています。近くには鍛冶作業に関連するとみられる壁の焼けた土坑も見つかりました。

炉の周りや土坑には多量の炭が堆積し、鉄製品や鉄滓などが多数含まれていました。鍛冶作業で不要となったものを近場に廃棄していたとみられます。鉄滓の中には、椀形滓（わんがたさい）（椀形鍛冶滓）があり、100 個以上出土しました。年代は出土した土器から、８世紀末～９世紀前葉頃と考えられます。

写真３　鍛冶炉（西から）

写真４　土器・椀形滓

写真５　椀形滓

れんげもんちゃん

第99次調査のまとめ

大型の掘立柱建物と、鍛冶遺構を発見しました。鍛冶遺構の年代は、政庁第Ⅲ期でも古い時期と考えられます。多賀城の政庁は、780 年に伊治公呰麻呂（これはりのきみあざまろ）の乱で焼失しています。すぐ北側に位置する鍛冶遺構は、政庁の復旧にかかわっていた可能性があります。また、掘立柱建物の柱の抜き取り穴に炭や鉄滓が多く含まれていることから、建物の年代も近いとみています。今後、建物と鍛冶遺構の関係などを詳しく調査する予定です。

第98・99次調査要項

所 在 地：宮城県多賀城市市川字新西久保・大畑地内
調査指導：多賀城跡調査研究委員会（委員長　佐藤 信）
調査主体：宮城県教育委員会（教育長　佐藤靖彦）
調査担当：宮城県多賀城跡調査研究所（所長　吉野 武）
調査協力：多賀城市教育委員会
調 査 員：初鹿野博之・古田和誠・村田晃一・鈴木貴生・矢内雅之
調査期間：令和5年5月15日～10月31日（予定）
調査面積：第98次調査=約300㎡　第99次調査=約400㎡

多賀城政庁の変遷

第Ⅰ期：創建（724年頃）～大改修（８世紀中頃）
第Ⅱ期：大改修（８世紀中頃）～火事（780年）
第Ⅲ期：火事からの復旧（780年）～地震（869年）
第Ⅳ期：地震の復興（869年）～11世紀前半

宮城県多賀城跡調査研究所
〒985-0862
宮城県多賀城市高崎1-22-1
ＴＥＬ：022-368-0102
ＦＡＸ：022-368-0104
http://www.thm.pref.miyagi.jp/kenkyusyo/

第98次調査の成果

第98次調査は外郭西辺を対象に、①第10次調査の再検討、②政庁第Ⅰ期・第Ⅱ期の区画施設の確認、の２点を主な目的として実施しました。調査区は、外郭西門と西北門のほぼ中間で、両者から約240m離れた低湿地部分にあり、第10次調査区と一部重複しています（第４図）。

調査の結果、区画施設とみられる柱列と、それに伴う整地、掘立柱建物（櫓（やぐら））などを検出しました。柱列は南北方向に溝を掘って直径20～30cmの柱を立て並べたもので、多賀城の西辺を区画する材木塀（ざいもくべい）と考えられます。Ａ～Ｃの３時期に分かれ、柱列ＢとＣでは柱の根元が腐らずに残っています（写真６）。柱列の東側（城内側）は土を盛って整地し、通路として利用していたとみられ、同様にA～Cの３時期に分かれます。また、掘立柱建物は東西１間×南北１間で、Ｂ期に伴う櫓と考えられます。

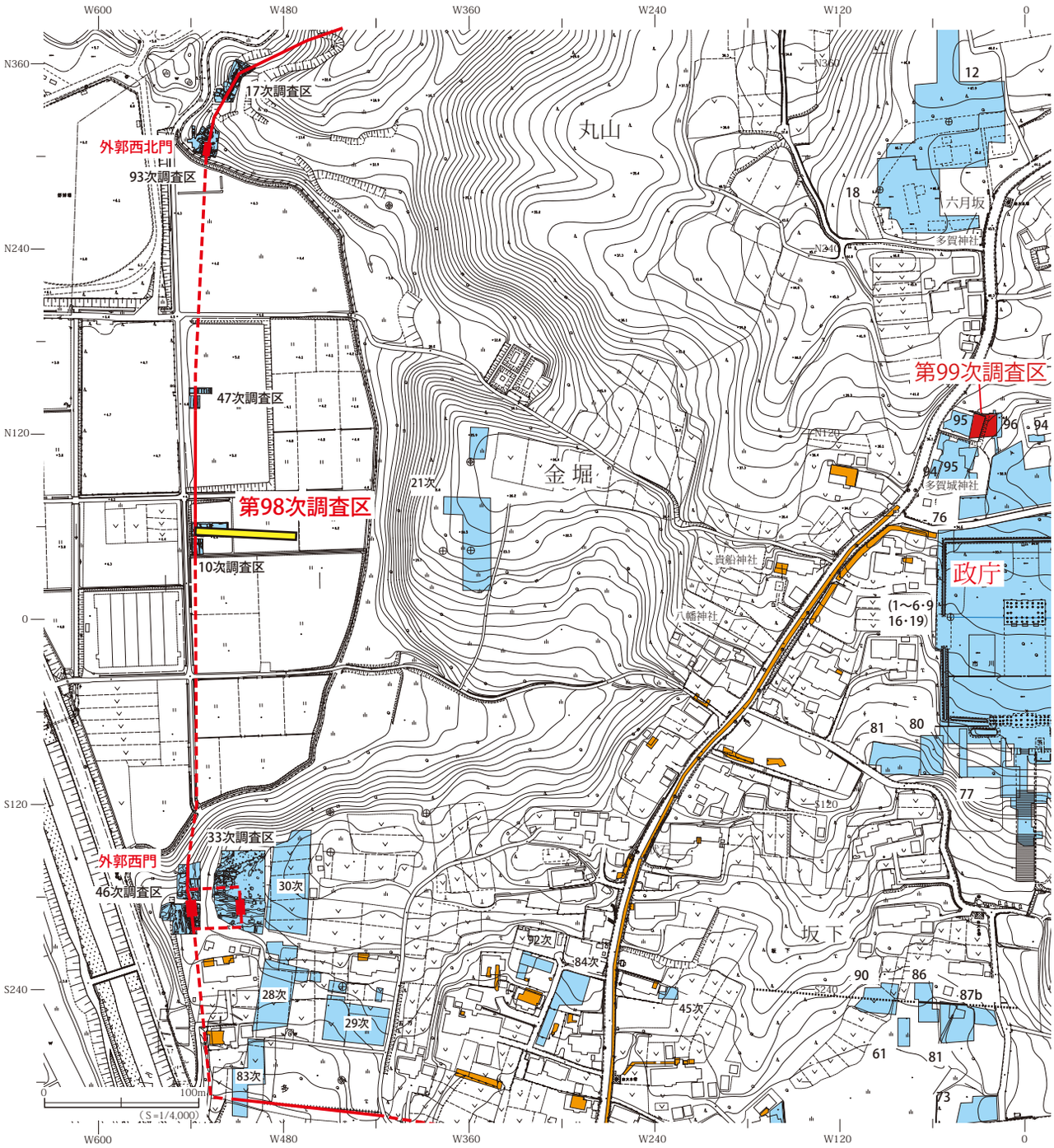
過去の調査や年代測定の結果から、Ａ期が９世紀前半頃、Ｂ期が９世紀後半頃、Ｃ期が10世紀前葉頃と考えられます。特にC期について、今回の調査区では、柱列Cや整地Cをつくる際に掘った土に、灰白色火山灰（かいはくしょくかざんばい）（十和田（とわだ）ａ火山灰）のかたまりが含まれることから、火山灰が降った後につくられたことがわかりました。なお、今回は東西方向に約60m分を調査しましたが、８世紀代の第Ⅰ期・第Ⅱ期にさかのぼる区画施設は検出されず、今後の課題となります。

写真６　第98次調査区西端部　南壁断面（北から）

写真７　第98次調査区西端部（南から）

※柱列Bと櫓の柱は、第10次調査の際に取り上げて、室内で保管しています

写真８　柱列Cに含まれる灰白色火山灰



第４図　第98次調査調査地点

写 真 ９　　第 98 次調査地点遠景（南から）

写 真 １０　　第 98 次調査区全景（西から）